

論 文

重田定一と広島高等師範学校

菅 真 城

はじめに

重田定一（シゲタ・サダカズ、一八七四―一九一八）は、広島高等師範学校最初の日本史専任教官である。本稿では、重田の活動を通じて、広島高等師範学校における歴史教育・研究について明らかにしたい。

重田の広島高師における活動については、「日本史では、広島藩の社倉法も研究した重田定一教授が、考古学とくに古墳研究を奨励し、尚古会をつくり雑誌も発行された」という簡単な記述が広島高等師範学校創立八十周年記念『追懐』（広島高等師範学校創立八十周年記念事業会、一九八二年）にあるのみである。また、重田は南北朝正閏問題がおこった後、南朝正統の国定教科書を編修した人物でもあるが、彼についての研究は存在しない。したがって、本稿ではまず重田についての基礎的事実を明らかにしなければならない。

重田に関する資料は、極めて少ない。まとまったものとしては、一九三四年（昭和九）一月に重田定一先生追悼会事務所（東京尚志会館内）から発行された『重田定一先生』（以下、『先生』と略記）が

あるのみである。『先生』は、広島高等師範学校地理歴史部・国語漢文部・英語部の第八回までの卒業生有志により、重田の一七回忌の記念事業として作成された追討録（非売品）であり、八丁春太郎（一九〇八年地理歴史部卒業）・関根順三（一九二一年地理歴史部卒業）が編集



重田定一

重田定一の肖像写真と自筆署名  
（『重田定一先生』より）

にあたった。同書には広島高師卒業生一八名のほか、重田の大学での恩師・三上参次、先輩・喜田貞吉や広島高師での同僚・新見吉治など、計三十六名が追悼文を寄せている。また、重田自身による日記や入院記も収めているが、重田の遺品はほとんどが関東大震災で焼失してしまっており、『先生』所収の写真や日誌類は唯一の遺品とのことである。同書には、「重田先生年譜」(以下、「年譜」と略記)「重田先生小伝」(以下、「小伝」と略記)も掲載されている。これらはおそらく、『先生』発行にあたって八丁春太郎・関根順三両名によって(更に推測を進めれば発起人であった八丁春太郎によって)著されたものと推定される。重田没後に教え子によって纏められたものではあるが、重田の生涯を知ることのできる唯一の貴重な文献である。

### 一、広島高等師範学校における歴史教育課程

一九〇二年(明治三五)四月一日、広島高等師範学校が設置され、九月には授業を開始した。学科は、予科・本科・研究科に分けられ、修業年限はそれぞれ一年・三年・一年ないし二年であった。本科は、国語漢文部・英語部・地理歴史部・数物化学部・博物学部の五部に分けられた。発足時の教職員定員は校長一・教授八・舎監一・助教授二・書記五の合計一七名にすぎなかったが、全学年がそろった一九〇五年には附属中・小学校も開設され、教授定員は三九名に増加し、教職員の内容が整った<sup>(1)</sup>。

本科に生徒が進学した一九〇三年(明治三六)四月には、広島高師

最初の歴史の教官として新見吉治が着任した。新見は一八七四年(明治七)生まれ、東京帝国大学文科大学史学科では西洋史のルドウィヒリースの指導を受け、一九〇〇年に卒業、大学院に進学し、その一方で史料編纂委員嘱託となっていた<sup>(2)</sup>。

新見は一九〇三年一月頃、東京で北条時敬校長と会い、広島高師へ赴任することになった。四月から本科地理歴史部が創設されるので、西洋史担当として、しかも最初の一年は日本史をあわせて担当するようになるとのことであった。一九〇五年に教授に任命される日本史の内田銀蔵は、広島高師教授となる内約で洋行中であった(内田は一九〇二年八月に文部省外国留学生として欧州に派遣されることとなり、一九〇三年一月から一九〇六年六月まで留学していた)<sup>(3)</sup>。新見は後年、「国民道徳を鼓吹せられた先生(北条時敬―菅註)が、何故地理歴史部創設に際して最初に国史の教授を任用せられずして、西洋史料出身者を物色されるに至ったかといふことについては、今尚ほ私の不審とするところである<sup>(4)</sup>」と述べているが、この人事は内田の洋行と関係があったのかもしれない。ここでその理由を説明することは出来ないが、北条が新見に白羽の矢を立てたのは、大学院時代に史料編纂委員として日本史の研究も行い、西洋史と共に日本史を担当することができる新見の研究歴に着目したものであることは出来よう。新見は広島高師では西洋史教授の傍ら、日本史の研究を継続した。新見に続いて、一九〇四年に日本史の重田定一が、一九〇五年には東洋史の中村久四郎が着任し、一九〇六年には内田が帰国して、歴史の教官は四名となった。一九〇三年(明治三六)に制定された「広島高等師範学校規則<sup>(5)</sup>」に

よると、地理歴史部の科目は、倫理、心理学及教育学、地理、歴史、法制経済、国語及漢文、英語、体操であり、独語、音楽のいない二科目が随意科目であった。歴史のなかでは、第一学年では「日本史、西洋史、歴史研究法」が一週間に八時間、第二学年では「日本史、西洋史」が七時間、第三学年の第一・二学期では「日本史・西洋史・東洋史」が九時間、第三学期では「日本史・西洋史・東洋史」が四時間であった。北条が新見に最初の一年間西洋史と日本史を担当するように求めたのは、このカリキュラムに対応するためであり、新見に続いて日本史・東洋史の順で教官が着任したのも、カリキュラムとの関係であった。なお、第一学年の総時間数は二八時間であるが、歴史・地理に割り当てられているのはそれぞれ八・四時間のみである。これは、広島高師の学科課程が、中等学校における教授能力の育成をその目標とし、専攻の科目を中心に多様な学科目をこれに配し、中等学校教員としてかたよりのない教養を企図して構成されたためである。

本科一年に配当されている「歴史研究法」は、東京高師のカリキュラムにはみられない。これは新見が歴史研究法を一時間講義したいと北条に願ひ出て許可されたものであり、<sup>(7)</sup>「歴史の教師を養成するには、歴史の学問が何であるかといふことを先ず教へねばならぬ、東京の高等師範の課程には歴史研究法といふものが挙がつて居ない、宜しく歴史研究法を一年生から教へるがよい」という新見の考えに基づくものであった。講義は新見が担当し、リンクやニールブルといった史家を引用して、歴史は科学か否かといった話がなされた。<sup>(8)</sup>新見は東京帝大一年次に坪井九馬三から「史学講義」を受けており、<sup>(9)</sup>広島高師の「歴

史研究法」は、一年生に史学論・歴史研究法を教えていた東京帝大史学科のカリキュラムの影響といえよう。大学院で歴史哲学を研究した新見の学問的関心のもたらすものでもあった。また、創設当時の広島高師は東京高師への対抗意識が強く、諸規則の制定に際しても東京高師を意識していた。<sup>(10)</sup>北条が新見の歴史研究法開講を許可した背景には、東京高師で未実施であったことが大きく影響していたとも考えられる。

北条は赴任前の新見に対し、「高等師範の東洋史は支那史を主とするがよい、近時流行の西域研究の如きは高等師範には不要である」との考えを語っており、新見は北条が「大学の立場と高等師範の立場と違ふところをほのめか」したと受け取った。<sup>(11)</sup>北条は広島高師が開校した一九〇二年に、「各学部主要ノ学科ノ程度ハ師範学校中等ニ於テ此学科ヲ教授シ得ル二十分ナル学力ヲ養フヲ目的ト」するのであり、「主要ノ学科ハ之ヲ専門トシテ深く攻修スルヲ目的トスルニ非ス主要ノ学科ヲ中心トシ之ト他学科トノ関係ヲ知ラシメ教育者ニ必要ナル円満ナル知識即チ教育的常識ヲ知ラシムルヲ以テ目的ト為ス是レ本校ノ文科大学或ハ専門学校ト性質ヲ異ニスル所以ナリ」と述べており、中等学校における教育の実際に即した学力の育成を目指したのであった。<sup>(12)</sup>広島高師では、一九〇六（明治三九）・七両年に植民地教育の視察を目的に、満韓修学旅行を実施した。第一回旅行の成果をまとめた『満韓修学旅行記念録』（広島高等師範学校、一九一〇年）の序文において、北条は「満韓地方を歴視して多種の学術的問題に接触したり。又教育を職務とするもの、立脚地より見て、亦多様の問題を附与せら

れたり。武力を以て発展したる国勢伸張は彼の如く偉大なりき。今後平和的に国民の勢力を確立するに必要な人事上の基礎は何なるか。植民的国民の性格は如何にして養ふべきか。外国人と安寧幸福を共有して海外に信義を維持して、而して優勝の地位を占むべき商業者の要素は如何にすべきか。半開陋俗の地を文化に導かんと欲する意志と、劣等人種を愛撫する情念とを養ふことは移住国民に対し目下要求すべき事項に非ざるか。此の如き諸問題は吾人を刺激して其の講究を促せり。」と述べ、第二回目の旅行に際しては「滿韓八十億ノ金ト十萬ノ生命トヲ犠牲ニシテ我勢力ヲ展ベタル地ナリ、我國民ハ海外ニ發展スベキ天ノ稟命ヲ有スルモノナリ」と訓示した。<sup>(4)</sup> 北条は天皇尊崇の考えの下、国家主義教育を全面的に肯定しており、<sup>(5)</sup> 東洋史は「支那史」中心にという北条の考えは、滿韓旅行と同じく植民地教育を行うための教師養成、帝国主義的国家観の育成という観点から出たものであり、それを授業内容に反映させようとしたのであった。北条が広島高師を離れるに際して開かれた送別会（一九一三年（大正二））での挨拶はこの事をよく示している。この挨拶で北条は「広島高等師範学校ノ社会的擴張」として五項目を挙げているが、その最後に「地理歴史部擴張」がある。その内容は以下のとおりである。

- (1) 目的ハ学問ノ為ナリ
- (2) 用ハ国勢ノ海外發展

移民 植民

国際商業ノ発達

- (3) 地域ハ支那本國、滿蒙、西比利亞、安南、シヤム、緬甸印度、

#### 南西諸島ニ対スル研究<sup>(6)</sup>

地理・歴史といった「学問」は、「国勢ノ海外發展」に資するためのものという認識である。同年の卒業式では、「歴史ハ之ヲ精神上ヨリ見レハ國民ノ精神ヲ鍛鍊シ現代國民ノ性格ノ基礎ヲ為シタルモノナリ其事ヲ叙スルモノハ過去ニ屬スト雖モ其精神ハ直ニ現代ノ人心ニ接ス」<sup>(7)</sup>との歴史観を示している。歴史を道徳的価値判断の基準として捉えていたのであった。

地理歴史部の歴史の課程は、一九〇七年（明治四〇）に第一学年「日本史、東洋史、西洋史、歴史研究法」八時間、第二学年「日本史、東洋史、西洋史」七、第三学年第一学期「日本史・西洋史・東洋史」一〇、第二学期同上九、第三学期「普通教育ニ於ケル歴史ノ研究」二、に変更され、各学年で東洋史が教えられることになった。<sup>(8)</sup>

一九一五年（大正四）、従来の予科・本科の制度を廃止し、文科・理科二学科に改め、それぞれを三部に分けた。これによって歴史・法制経済を主要科目とする文科第三部の学科目は、修身、教育学、歴史、法制経済、地理学、論理学、生物学、心理学、哲学、国語及漢文、英語、体操となった。歴史の中の配当は、「国史、東洋史、西洋史」が第一学年六時間、第二学年七時間（最小限二時間）、第三学年九（最小限二）、第四学年第一学期一〇（最小限三）、第二学期一一（最小限三）となった。<sup>(9)</sup> 「日本史」の名称が「国史」に変更されるとともに、新見によって開設された「歴史研究法」が姿を消した。次に変更が加えられたのは一九三二年（昭和七）年で、第一・二・三学年はそれぞれ、「国史・東洋史・西洋史」が四・九（最小限二）・九（最小

限二)、第三学年の第一・二学期が「国史・東洋史・西洋史・史学研究法」一〇(最小限三)、第三学期が「史学研究法」二となり、第四学年になって「史学研究法」が教えられるようになった。<sup>(20)</sup>

## 二、重田定一の生涯

### 1 誕生・学生時代

本節では、主として「年譜」「小伝」によりながら、重田定一の生涯について明らかにする。重田は一八七四年(明治七)二月一日、兵庫県揖東郡林田村(現姫路市林田町)で生まれた。<sup>(21)</sup> 重田家は元々信州真田家に仕えていたが、一七七四年(安永三)からは播州林田藩に仕えた。父定興は医業に従事し、母昭子は林田藩の儒者河野鐵兒の長女であった。重田は幼少の頃、外祖母保子(鐵兒未亡人)の膝下にあることが多く、書画や蔵書に親しむことも多かった。保子は幼少の重田に、「広島島の頼氏は、兄弟叔姪学問を好み、子々孫々業を伝ふ、外祖父君常にこれを称しこれを羨みたまへり、外祖父君の詩は芳野三絶の一たり、杏坪先生の芳野懐古詩も亦これと併せ称せらる」と語ったという。重田は後に頼杏坪について研究するのであるが、杏坪の存在を知ったのは、わずか七・八歳の頃のことであった。<sup>(22)</sup> このような幼少期の環境が、後の重田の研究に大きく影響したものとおもわれる。この点に関して、大学時代の恩師三上参次は、「君は同郷の詩人河野鐵兒翁の外孫である。君と談話の際屢々鐵兒翁及び其の嗣河野天瑞博士に就いて語られるのを聞いた。特に鐵兒翁の詩や書の事を語られたやう

である。随つて重田君が相当に文操に富み、頼杏坪・岡田寒泉・小島蕉園と云ふやうな碩儒に就いて研究し、此の類の事に特に興味を有せられたのも、一つに鐵兒翁の血統といふことが原因となつたのではないかと思ふのである。又同藩の林田からは股野藍田翁も出て居られ、翁にも親近して居られたので、旁々さやうな方面の研究に興味を有つて居られたのではないかと思ふ。」<sup>(23)</sup>と述べている。

一八七九年(明治一二)、林田村敬業小学校に入学、一八八五年明治天皇岡山・山口二県巡行の際には、給仕として揖東郡太田村に召し出された。同年、神戸に出て神戸師範学校附属小学校高等科に入学し、択善学舎ではドイツ語を学んだ。一八八七年には大阪に移り私塾で学んだが、翌年には兵庫縣尋常中学校第三学年級に入学した。一八八九年、中学四年終了で第三高等中学校の選抜試験に合格し、予科第三級に入学した。重田は運動は好まず、天気の良い日曜日には京都の名勝を訪ねて詩歌を作るのを楽しみにしていた。<sup>(24)</sup> 広島高師時代の重田は、毎年修学旅行で京都・奈良に出張していたが、生徒たちは重田のあまりの地理の詳しさに驚いたという。このエピソードは、高等学校時代の重田がいかに近畿地方の史跡を探訪していたかを物語るものである。なお、のちに広島高師の同僚となる塚原政次は三高の同級生、一年先輩には歴史学者喜田貞吉がいた。

一八九四年(明治二七)、第三高等中学校文科を卒業し、帝国大学文科大学に入学した。大学では、国史科を専攻し、同郷の三上参次の指導を受けた。一八九六年には特待生に選定された。国史科を選んだ理由について、三高・帝大を通じての同級生中村徳五郎は、「日本の

外交の腰の弱いのは、日本人でありながら国史を知らないからである。孫子に彼を知り己を知つて百戦殆からずといふのは、必ずしも戦に限らない、日本の外交官は彼を知らず己を知らずではないか。法科の学生は弁論の雄を以て自ら任じてゐるが、口先きばかりでは国家の重きに任じ得られない。吾々お互は物質的の利欲を離れ、社会的地位とか権勢とかを眼中に置かず、出来得べくんば研究の結果を死後に齎さうではないかと言ふのが、博士の持論であり、又私の理想でもありました。」と記している。恩師三上参次は、大学時代の重田について、次のように語っている。

重田定一君は私と同国と云ふ関係で、その学生の時から特に知つて居つた。併しながら教師と学生と云ふ関係にあり、又同君の大学卒業後には先輩後進の關係にあつた故かも知らぬが、特に同君から受けた特異なる印象の深く記憶に存するといふやうなものは思ひ出せない。教授としては可なりやかましやであつたとも聞かぬが私としてはたゞいつも勤勉で、研究に熱心なる学徒として思ひ出し得るに止まるのである。大学に於ての在学中の成績も随分良好であつた。

一八九七年(明治三〇)、東京帝国大学文科国史科を卒業すると、大学院に進学した。この年、福山の医者早間退介の四女しつ(倭文字)と結婚した。重田は高等学校時代一学期間休学したことがあつたが、それは大変な美人であつたしとの結婚を切望してのことであつたといふ。厳格だつた重田の以外な一面を示すエピソードである。

## 2 東京帝室博物館時代

一九〇〇年(明治三三)八月三十一日、重田は東京帝室博物館歴史部次長事務嘱託となり、翌年一二月には、同博物館学芸委員を仰せ付けられた。一九〇〇年七月一日、帝室博物館官制の施行により、帝国博物館は東京帝室博物館と改称していた。これにより、東京帝室博物館には歴史部・美術部・美術工芸部・天産部の四部にそれぞれ部長(兼任)・部次長(判任三等以上)・技手(判任)が置かれた。部次長は今回の改正で新たに設けられた職であり、「部次長ハ東京帝室博物館四人：部長ヲ助ケ部務ヲ処理ス」(官制第六条)ことを職務とした。学芸委員、嘱託員についても、それぞれ「学芸委員ハ東京帝室博物館七人：奏任待遇トス 総長又ハ館長ノ命ヲ承ケ列品ノ鑑査解説又ハ編纂著訳ニ従事ス」(官制第一条)、「實際ノ須要アルトキハ各帝室博物館ニ嘱託員ヲ置キ 部長部次長ノ事務又ハ列品ノ鑑査解説ヲ委嘱スルコトヲ得」(官制第二二条)と明記された。歴史部長には、かねて学芸委員として歴史部長心得であつた高等師範学校教授三宅米吉が任命された。重田は、三宅米吉の推挙により歴史部次長事務嘱託となつたようである。このことについて喜田貞吉は以下のように記している。

重田君は自分と同じく第三高等学校の出身で、自分と同じく帝大文科に国史科を履修せられ、私交上に於て種々關係する所が少くなかつた。高中でも、帝大でも、君は自分よりは一年後れて居られたので、家庭的の交際まではさう親密といふ程でもなかつたが、奇態にも君はよく自分の歩んだ跡を歩行いて行かれたものだつた。自分は帝大を卒業して歴史地理専攻といふ事に看板を掲げてとも

かくも史蹟の調査を心がけて居たが、君もやはり此の方が御熱心で、それが認められてか故三宅米吉先生の知遇を得て先生の下に博物館の歴史部に就職せられた。<sup>(80)</sup>

重田がはじめて発表した論文は、東京帝国大学文科大学を卒業して大学院に入学した直後に『史学雑誌』に発表した「勘籍と蠲符との幣源を論ず」<sup>(81)</sup>であり、翌年には同誌に「四度使考」<sup>(82)</sup>を発表している。大学時代に専門に研究していたのは律令財政史であり、直接史蹟にかかわる業績ではない。また、この間に教科書の執筆なども手がけていた。重田の博物館への就職は、三高時代から抱いていた史蹟への関心が、三宅によって認められたものといえる。

東京帝室博物館発足にあたって列品の分類区分が改められ、歴史部は一二に区分されたが、重田は「第一区 典籍・文書・図画・金石文・版木」の調査保管を担当した。正倉院文書影写本の整理も行った。<sup>(83)</sup>

### 3 文部省時代

一九〇四年（明治三七）四月、広島高等師範学校講師を嘱託され、同年六月には教授に任ぜられた。以来七年間、広島高師において教育・研究にあたるのであるが、この間のことは後述する。

一九一一年（明治四四）三月、文部編修（高等官四等）に任ぜられ、国定教科書の編修にあたることになった。辞令が出たのは三月二〇日、三月三一日午後二時五八分広島駅発の列車で東京へ向かった。広島を離れる前日の夕方には、比治山にある頼杏坪の墓に参つて<sup>(84)</sup>いる。この文部編集任官は、南北朝正閏問題で喜田貞吉が休職処分とされた後を

受けてのことであつた。<sup>(85)</sup> 重田が喜田の後任にあてられた理由を詳らかにすることはできないが、広島高師での教え子は次のように記している。

本科三年の頃（一九〇九年頃―菅註）でもあつたらうか、時の文相小松原英太郎氏が広島高師に見えられ、特に重田先生の授業を所望して参観した事があつた。其時間は我々の時間にあつたので、一時間を非常に緊張裡に終つたことを記憶してゐる。校長先導で大臣始め十数人の高官が教室若くは廊下に立つて居たので、非常に恐ろしかつたことを覚えて居る。それで望をかけられて、先生は終に文部省に入つたといふ話を後に聞いた。此時間に於ける先生の授業の真剣さも希に見る位のものであつた事をも附記して置く。<sup>(86)</sup>

この問題は、史学史や教育史の問題としても重要であるが、詳しい考察は他日を期すこととし、ここでは『先生』に寄せた喜田貞吉の文章「重田定一君の追憶」の關係部分を紹介することに<sup>(87)</sup>する。長文ではあるが、喜田自身が南北朝正閏問題を総括したものであり、史料価値も高いと考えられる。

是等はともかく重田君が、自分の跡を追つて行かれたもの、中に数へられる訳ではあるが、一番著しいのは明治四十四年の二月に、自分が例の南北朝正閏問題で文部省を首になつた後を承けて、広島高師教授から文部編修に転任せられ、自分の味噌を付け放しにして置いた国定歴史教科書の跡始末をせられた事だ。

自分の南北朝正閏問題に関する失敗は、自分が一方に歴史家として、又一方に教育家として、二足の草鞋を履いた所にある。従来<sup>(88)</sup>の日本史教科書は、執れも南朝正統説を執つて居た。それは大

日本史の筆法に従つたものであらうが、中には大日本史の態度を超越して、露骨に北朝の将士を賊と書いたものも少くなかつた。自分が文部省に就任の翌年、後の有名なる教科書事件なるものが突発して所謂国定教科書なる制度が制定せられ、自分は歴史と地理の教科書を編纂すべく命ぜられたのだつた。当時は別に編纂機関の官制もなく、従来民間教科書検定の為に置かれた有合せの役人の外に、僅に地理と歴史とに各一人の助手を囑託しただけで、三十六年の一月から着手して、引続き検定事務を執つて居る傍で、其の年内に歴史教科書五冊、地理教科書四冊を作り上げようと云ふのだから、其の忙しい事は一通りではない。到底十分研究推敲するの余裕などは無かつたが、それでも特に歴史教科書に就いては単に史実を教へるといふばかりでなく、是によつて忠良なる臣民の志操を養はうといふのだから、さう手輕に片付けてしまふ訳には行かぬ。出来るだけは慎重に考へても見た。中で一番頭を悩ましたのは南北兩朝の扱方で、若し北朝を賊とする様な筆法を採つたならば、それを下手に説明せられては其の後の納まりが妙なものになりはせぬかとの懸念がある。殊に尊氏直義等を賊としたならば、形の上で全然同一な筈の頼朝義経をも賊とせねばならぬ。併しそれでは明かに我が国体が賊の成功、暴力の勝利を露骨に認めるものだ。国定教科書としてそれはどうも出来ぬ事だ。されば大日本史流に南朝を正統とし、北朝を閏位として其の間輕重を附する事にするとしても、現に宮内省では南朝の天皇に対し奉りて、山陵祭祀等の御扱の上に、少しも輕重を認めて居られぬのが實際

であり、御歴代の立て方に就いて伺つて見ても、未だ御決定が無いとの事であつて見れば、たとひ政府の仕事としても、臣子の分として私に輕重を附し奉る事は、僭越の至であると考へた。そこで暫く東京帝大の史料の例に倣ひ、兩朝を対立として其の間輕重を論ずる事なく、たゞ臣下の側に就いてのみ正邪順逆の次第を明かにし、正成義貞等が忠臣の鑑である事は勿論ながら、尊氏直義等も合法的悪人といふ程度に止め、敢て逆賊とは見なさぬ事に肚をきめたのであつた。

然るにそれがゆくりなくも、文部省は天に二日の存在を認めるかといふ攻撃を受ける事になつた。そして折悪しくも幸徳秋水等の大逆事件とかち合つて、それを結び付けられて問題にせられたので、事が非常に面倒になり、はてはそれが政治問題化して内閣の責任を問ふといふ様な事にまで進展して遂にペシヤンコになつてしまつたのであつた。結局執筆者たる喜田のみが悪いといふ事で、それは忽ち首になり、教科書は南朝正統流に改訂して見がつた。

後になつてわかつた事だが、是はさう落付くのが当然の事なで、<sup>(マ)</sup>実は南朝正統といふ事の大精神は、明治二十四年皇統譜御編纂の際に於て、すでに明治大帝陛下の御裁可を仰いで遠の昔に決定して居る事なのであつたのだ。そしてそれを皆が忘れて居たのだ。宮内大臣以下宮内省の役人も皆それを忘れてしまつて、帝室年表調査委員会といふものまでが出来て、南北兩朝孰れを正統とすべきかといふ様な事が問題とせられて居る様だつたのだ。内閣の人



達も、乃至一般の政治家教育家達も、皆それを知らなかつたのだ。若し其の事が聊かでも曩に知られて居たのだつたなら、何もわざわざ苦心しながらあんな南北朝対立などの筆法を執る事もなく、当初から大日本史流の南朝正統説を執るべきものであつたのだ。此春蒲原に南北朝正閏問題当時の宮内大臣田中光顕伯をおたづねして、是に就いてお伺ひして見たが、伯爵も実際そんな御決定のあつた事を一向御存じなかつたのだと言はれる。「併しそれでは大臣としての御責任がすみますまい。のみならず事実上文部省は宮内省にだまされた為にあんな教科書を書いて飛んでもない大問題を惹き起し、其の執筆者としての喜田は首になつたのですが、それはどうして下さいませ。」と冗談を申し上げると、伯爵は苦笑せられて「今更引責辞職も出来まいで嘯。」とおつしやる。こんな始末で知らぬ事から飛んだ失策を仕出かして結局自分一人が休職になり、其の後任として重田君が広島高師から選ばれたのだつた。

文部編修としての重田君の仕事は、さし当り南北朝正閏問題でポロを出した教科書の跡始末だ。何分事の起りが天に二日を認めるかといふ攻撃であつたのだから、よしや南朝を正統と立てるにしても、大日本史の執つた如き、やはり北朝の天皇を閏位の君として認めるといふ様な微温的の改訂で到底納まらなかつたものとして見えて、修正教科書には全然北朝なるものゝ存在を認めず、時代名をも吉野朝となし、北朝の諸天皇から天皇号をまで削り奉り、大宝令の規定のまゝに、皇親の次第によつて親王或は諸王に下し、勿論尊氏直義等は賊として之を直書する程の徹底的のものだつた。

併しながら北朝の諸天皇に対し奉りては、明治大帝御孝心の思召によつて御歴代は南朝によつて数へ奉る事となつたに於ても、尊号及び御陵祭祀等は、すべて従来の通なるべしとの御沙汰があつて、宮内省では引き続き其の聖旨のまゝに、何等従前と変るところがなく、無論之を天皇として御尊敬申上げて居るのである。又勅令と同等の権威ある皇室令に於ても、其の陵墓令、皇統譜令には、光厳天皇以下所謂北朝の諸天皇に対して明かに天皇の尊号を以て記述して居られるのである。然らば今文部省に於て其の尊号を削り奉り、親王諸王の列に下し奉つた事は明かに明治大帝の聖旨に背き奉るものであるのみならず、同じ国家の機関に於て其の御扱ひに相違を呈して居るのであるが、当時の文部省としては、勢の赴く所洵に已むを得なかつたもので、其の当事者なる重田君の苦衷をお察すると実にお氣の毒に堪へぬものなき能はぬのである。況や尊氏直義等北朝方の臣僚を賊として直書した結果として、同一型式のもとに居る頼朝義経等をも当然朝敵として扱はねばならぬ筈であるに拘らず、それは当時何等問題にならなかつたが為に旧のまゝに放置といふ様な矛盾までは、到底考へて見られるだけの余裕もなかつたものらしいのである。

併しながら、そんな問題はともかくとして国定教科書の修正もこゝに一段落となり、君は文部編修として一方には引き続き日本歴史を担当せられながら、傍ら宮内省に入つて明治天皇御紀の編纂に従事せられ、なほ其の間に史家としてこの研究をも怠られなかつたのであつた。而してそれは忠実なる君に取つて可なり重い

負担であつたらしい。或る時君は自分の宅へ来られて、こんな述懐をせられたことがあつた。「君は文部編修として歴史と地理との両科に涉つて検定と編纂とをまで担当しながら、傍ら東京と京都と両帝大に講師を勤め、其の間には歴史地理其の他の諸雑誌に断えず論文を発表し、学位論文をも纏められた、僕は広島に居た時に之を見て、文部省は如何にも暇な役所で身体も利けば、好きに勉強が出来るのだと、羨しく思つた事があつた。それで曩に君の後任として交渉を受けた時に、君の時とは違つて歴史だけ受持てばよいのだとの事に、一層好きな事が出来ると喜んで来て見たが、思ひの外に忙しく、殊に教科書調査委員の諸氏を相手に、時にはいやな思ひをせねばならず、殆んどやり切れない。君はどうしてあんなに暇が得られたのか。」と言はれるのだ。成る程御尤な疑問で自分も忙がしいには忙がしかつたが、大抵の事は信頼する助員の人々にお任せして、検定の事は多く盲判で間に合はせ、編纂の事も助員の人々と方針を協定さへすれば、あとは大抵其の人に任せ切りで、其の起稿したものを自分の独断で修正加筆し、一々其の理由を聞いたたり、諒解を求めたりといふ様な煩瑣な手数を取らなかつたが為に、比較的進行も早く、ともかくも一年間に九冊の教科書を脱稿したり、其の間に好きな研究に手を染めたりする事が出来たのだつた。然るに君の忠実なる、検定にも一々目を通される、起稿にはいつでも一々協議せられるといふ風で、万事がさう手軽に運べなかつたものらしい。そして其れが為といふではなからうが、中途に病を得て長逝せられた事はかへすがへす

残念な事であつた。

重田が文部省に赴任した当時の図書課長で図書審査官も兼務していた渡部董之介<sup>(8)</sup>は、「君はもと其の令名を聞くのみで相知の間柄ではなかつたが、明治の末南北朝問題が起つて後、広島高等師範学校から文部省に來任され、新に国定教科書編纂主任となられたのであつて、從來国定教科書編纂の事務に當つて居た余は初めて君と接触したのである。南北朝問題の為に世論の紛糾を生じたのは遺憾であつたけれども、南朝を正統とする大方針の下に天皇御歴代の順位を明確に記載して、従て後醍醐天皇を何代の天皇、明治天皇を何代の天皇と云ふが如く称し奉り、之を国定の史上に明記することの出来るやうになつたのは、雨降つて地固まるの觀があつた。重田君の來任は正に大地の固まつた際であつたけれども、右の方針による既往教科書の修理の細目に涉つては君の力を要したことが少くなつたのである。差向き君は其蘊蓄抱負を披瀝して此の修理の為に努力せられ、夫れが終つて、又時の推移により別に全体大改良の歴史を出さんとする時、不幸病に罹り致せられたので、君の遺憾を察すると同時に、尤も密接に関係ある余輩關係者の如きは茫然として君の早逝を悲しんだものである。」「君は当時に国定教科書歴史修正に就いて尽力せられたる先輩東京高等師範学校教授三宅米吉博士と意気投合し、博士と協力して調査を進められたのである。」と記している。南朝正統に政治決着した後に、重田は帝室博物館時代の上司三宅米吉の協力を仰ぎながら、教科書の修正にあつたのであつた。重田の文部編集任官にあつても、三宅の推挙があつたのではなからうか。なお、重田は一九一二年(明治四五)二月

二五日に神奈川県教育会総会において国定教科書修正の要点について講演しており、「修正国定歴史教科書に就て」と題して重田著『史説史話』（弘道館、一九一六年）に収められている。

一九一三年（大正二）六月、重田は文部図書官に任ぜられ、一九一四年一月には文部督学官を兼務し、普通学務局勤務を命ぜられた。また、同年一二月、明治天皇紀編纂のために宮内省に新設された臨時帝室編集局編集も仰せ付けられた。

その後重田は胃腸を患い、一九一七年（大正六）六月には東京帝国大学医学部附属病院に入院し、手術を受けた。病名は癌であった。<sup>(40)</sup>八月に退院してからは自宅で静養に努めたが、病状は回復しなかった。翌一九一八年一月、学位論文とするべく旧稿を整理して「頼杏坪とその経済説」を執筆し、三月に「頼杏坪とその経済説」を主要論文とし、「備後国大田庄」と「広島の新開地」を参考論文とする学位論文を京都帝国大学に提出した。いずれも、広島時代の研究成果である。四月に重田が昏睡状態に陥ると、時の文部次官田所美治は京都帝大講師喜田貞吉に学位審査が進むように依頼し、喜田はそれを教授内田銀蔵に催促した。<sup>(41)</sup>重田と喜田との関係については既述したが、内田も帝大の一年先輩であり、一九〇六年（明治三九）には共に広島高等師範学校教授であった。<sup>(42)</sup>重田が学位論文提出先を東京帝大でなく京都帝大としたのは、こうした人間関係によるのではなからうか。内田の審査報告に基づいて早急に教授会を通過し、四月八日、文学博士の学位が授与された。ちょうどその日、重田は四六年の人生に幕を下ろしたのであった。

### 三、広島高等師範学校における重田定一の活動

#### 1 職務経歴

前述したように、一九〇四年（明治三七）四月から一九一一年三月まで、重田は広島高等師範学校に在職した。四月一二日に着任した当初は講師嘱託であり、一九〇四年六月一日に教授に任ぜられた。新見吉治（一九〇三年四月から一九二九年三月まで広島高等師範学校教授、一九二九年四月から一九三八年三月までは広島文理科大学教授兼広島高等師範学校教授）は、一九一七年（大正六）に「近來は堂々たる経歴をもつた同僚の諸先生が先づ講師として着任せられ、短からぬ年月を経た後始めて任官せらるゝやうに、六ヶしい世の中となつた」と述べているが、重田の事例から、すでに開校三年目には、まず講師を嘱託された後に教授に任命されるようになっていたことがわかる。広島高師教授時代の重田の活動を明らかにするにあたって、まず、重田の送別式における北条時敬校長の演説概要及び経歴を掲げておく。<sup>(44)</sup>広島時代の重田の活動を概観できる史料であり、以下ではこの史料に基づいて、個別の事象について明らかにしていくことにする。

重田教授送別式演説概要 三月二十五日

一 明治三十七年四月新任以来今日に至り在職満七年ナリ

一 国史ノ教授 修学旅行ノ指導 国史ニ関スル標本ノ蒐集製作以

テ特別教室ノ創始

一 右ノ外職務上著シキ事項ハ左ノ如シ

(イ) 日本歴史術語称呼ノ取調

(ロ) 附属中学校ノ地理歴史科ノ取調及ビ同科目普通教育上ノ一

般研究

(イ) 図書課ノ評議員

又校友会ニ関スルモノハ

(ニ) 地理歴史学会ノ主事 又ハ主任

(ホ) 絵画同好会ノ評議員若クハ主事

右等ノ事項ト其外當時又ハ臨時ニ於テ分担ノ任務ニ於テ各勤勞ノ功績大小ノ差等アリ又隨時意見ヲ提供シ建明セラレタルコト屢ナリ之ヲ要スルニ教授ハ能ク職務ニ尽瘁セラレ本校教育ノ業ハ教授ニ負フ所多シ

吾校ノ歴史科ハ新見教授創設ニ着手シ重田教授ノ来任ニ由リテ歴史標本室ノ創設セラレタル以來教授ハ頻リニ諸方面ヨリ標本ヲ蒐集セラレ自ラ有用ナル標本ヲ寄附セラレタルモノ多シ吾校ハ教授ニ感謝ス

(中略)

一重田氏ノ転任ハ南北朝問題ニ依リ本省ニ更送ヲ要シタルガ為ナリ本校ハ普通教育本省ノ施設上ノ必要ニ応シテ重田氏ノ本省ニ転任セラル、ノ適當ナルコトヲ認メ茲ニ式ヲ挙ケ従来ノ其勤勞ヲ謝シ功績ヲ述ベテ以テ同氏ヲ送ル

重田教授職務上ノ経歴 (明治四十四年北条校長訓辞演説綴)

明治37年4月12日	講師ヲ嘱託ス	学校
明治37年6月11日	任教授 <small>叙六等</small>	内閣
明治40年3月15日	広島県下ニ於ケル史料収集ヲ嘱託ス	東京帝国大学
明治43年6月9日	明治四十三年度第二回師範学校中学校高等学校教員等講習会講師ヲ嘱託ス	文部省
明治37年7月4日	歴史学科教授器械標本及該科ニ属スル共用物品ノ監守ヲ命ス	学校
明治37年10月4日	図書課評議員ヲ命ス	学校
明治39年2月8日	卒業式準備委員ヲ命ス	学校
明治39年5月25日	日本歴史術語称呼ノ取調委員長ヲ命ス	学校
明治39年9月28日	付属小学校ノ日本歴史地理付属中学校ノ歴史地理科取調委員長ヲ命ス	学校
明治40年11月9日	地理歴史科研究会常任委員長ヲ命ス	学校
明治41年9月8日	歴史科主任ヲ命ス	学校
明治44年1月9日	修身教育科研究会臨時委員ヲ命ス	学校
明治38年4月30日	学芸部委員ヲ委嘱ス	校友会
明治39年3月26日	明治三十九年度講談部(地理歴史学会)主任ヲ委嘱ス	校友会
明治40年3月6日	明治四十年同前	校友会
明治40年12月14日	絵画同好会評議員ヲ委嘱ス	校友会
明治41年4月29日	明治四十一年度地理歴史学会主事ヲ委嘱ス	校友会
明治41年11月12日	常任批判会員ヲ委嘱ス	校友会
明治43年4月21日	明治四十三年度絵画同好会主事ヲ委嘱ス	校友会

## 2 授業

『尚志同窓会誌』第四号(一九〇九年)は、重田の授業の様様を次のように伝えている。

重田先生は近時徳川時代史を人物中心主義にて教へられ候。国史読本の予習には相変らず多くの時間を要し、大仏の鐘銘、公武諸法度等には少からず閉口いたし候。又別に課題(例へば元禄時代、国学の勃興、徳川時代の実業等の如き)有之、時を定め、或る一人がそれにつき説明し他の一人、これが批判の任にあたる事となり居り従つて其問題取調のためには随分図書館通ひも流行いたし居り候。

また、『先生』には、重田の教え子たちの追悼文が一八通掲載されている。教え子たちの語る重田像には共通するものがあり、これらによつて重田の授業の様様をある程度再現することができる。ここでは、栗田茂治の文章を紹介することにしよう。

私は第五回の地歴出身で、丁度四十年の四月から四十三年の三月まで丸三年御薫陶を受けました。予科に居る時から上級生から「重田先生は恐い恐い。」と教へられて居るので、戦々恐々として教室に入つて見た。一年の始めの頃は「筆記をするな。」と云はれるので、弱つて教室では聞いて帰つてあとから筆記したりした。「この事は図書館に入つて何々の本で調べるとわかる。」といはれる。其次の時間には必ず誰か、「其本がどんな本であつたか。」と先生に聞かれる、それをゴマかして云ほふものならひどく叱られる。図書館員は「今日は重田先生の授業が何年にあつ

たか直ぐにわかる。」と云つて居た。これは先生の授業のあつた日参考書を指定されると、早く見ないと他人に取られる故、同じ本を殺到して借りに行く為にわかるのである。当時の図書館員牧野信之助氏なども其点よく心得たもので、一年が上古史に入ると何の本を借りに来ると用意して居り、又時には其本ではわかりませんと云はれる位であつた。(中略)

重田先生が恐ろしいと云ふのは、よく何でも一人一人に問うて見て、正しいか正しくないかを判断する、其練り方がきつかつたからである。人を見て法を説く仕方もチャンと心得て居られた。生徒には先生の御年齢が非常に古くて見え、四十を遙かに越えなされた様に見えた。其の老成の御様子は我我の信頼を深くした。一方には恐いが一面にはやさしい先生で、時々シャレを云つては微笑をして居られる。ニブイ人はそれが分らない。「先生あの時何を笑つたのだらう。」といった人もあつた。(中略)

先生は京阪地方の地理には非常にあかるく、本科一年を終へた学年休に歴史指導旅行を級一同と共にした事がある。「こゝの小道を行くと何があるそれを見て返りなさい。」と云ふ風で、皆其のくはしいのに呆れて居た。我々の前に四回指導旅行をせられたが、四回位であんなにくはしくなるものではなく、高等学校時代あたりから御旅行をなされたのであつたらう。(中略)

本科三年の夏休みに国史の夏期作業として久保田城(佐竹侯の秋田城)の調査を命ぜられた。しかしこれは只一枚の地図を出せばよいので物足りないから、自分の考で古い秋田城の研究を諸種

の方面から遂げて帰つて報告した所、先生から「君の研究は非常によろしい。学界のためにもすこし研究し給へ。それには四王寺といふものを研究しなければならぬ。それにはしかじかの参考書を見るがよい。」と云はれ、それを見て考を付して上げた所が、広島で発行して居る「尚古」と云ふ雑誌に掲載して戴いた。これが私の城廓研究に興味を持つ始めであつた。先生は其頃既に文化史の必要なる所以を覚られ、厳島の美術品を説明せられ、宮島の雅楽を聞く機会を造られ、此方面から諸種の趣味を会得させられた。世の所謂政治史だけを歴史の本領と解する先生達と甚だ選を異にしてゐた。一言にして云へば新井白石の学才を思はせる指導振りという方が当るかも知れない。

重田はかつて大森金五郎とともに編纂にあたつた『国史読本』(富山房)を教科書として使用した。この書籍は、東京帝国大学文科大学教授で史料編纂掛の編纂委員であつた星野恒が、高等学校用の国史教科書編纂を企図したことにはじまる。この編纂は第一高等学校講師であつた大森金五郎に嘱託され、大森が重田に補助を求めたのであつた。星野は史料編纂掛の内規により編纂に従事することはできず、大森・重田の手によって一八九八(明治三一)・九九九年に上・中・下三分冊で刊行された。『国史読本』は概説書ではなく、各章ごとに正史・古文書などの史料を原文のまま収録したものであり、章末に解説や参考史料を付記している。高等学校において意義・読法の教授に供するものであるという観点から、送りがな・返り点等は付されておらず、初学者が読みこなすにはかなり困難なものである。重田はこの書

の予習を課しており、生徒にとつてはハードな課題であつた。

授業中重田は、当時としては珍しく、盛んに質問を発しながら、自由闊達に講義した。時には叱責し、時には皮肉を交え、時にはユーモアを交えながら。重田は生徒が筆記するのを嫌い、「筆記をするな」と命じるほどであつた。後年重田は私立岡山教育会での講演で「筆記に勞して解釈に困るといふは極めて良しく無い」と述べている。したがつて、必然的に講義ノートを読み上げてそれを筆記させるという講義形式でなく、発問を交えての講義になつたのであろう。この重田の方針に当時の生徒たちはとまどつており、寮に帰つてから筆写するものもいた。ある生徒は、「君、四度の使とは何かね。」「そんな事が知らないかね。」と叱られ、かなりショックを受けた。四度使はかつて重田が論文を執筆したテーマではあるが、かなり専門性が高い事項である。また、ある生徒は重田の授業を次のように回想している。

教授の際に於ける熱心振はまた別格で、或時は討論的に遠慮会釈なく次から次へと質問を連発する。此の間皮肉もあれば攻撃もあり、まるで戦鬪気分とでもいふ光景を呈することも尠くなかつた。随つて学生の方も用心をし、自ら真剣みを加へる。実力はつく。研究向学心は燃えあがる。誠に先生の授業は油断の出来ぬ能率百パーセントであつた。<sup>(46)</sup>

一時間の講義が終わると、参考文献を指定して二・三時間分の課題が出た。そのため、生徒たちは先を競つて図書館に詰めかけた。図書館職員の方からアドバイスすることもあつた。当時の図書館職員のレファレンス能力は相当のものであつた。次の授業時間では、課題につ

いて発問がなされ、十分な答えが出来ないと容赦なく叱責された。信任を得た生徒には優しくかった。学期試験問題は、この課題の中から出された。試験中に重田は生徒の書きかけの答案に朱を入れ、解答を批評して回った。この重田の行動に生徒たちは閉口していた。

重田は単に教室内で講義するだけでなく、史蹟や遺物などの実地観察・検証に力を入れた。特に古墳の調査に熱心で、生徒を引率して県内の古墳をめぐり、その分布地図を作成し、歴史標本室には発掘遺物や古瓦類などを集めた。<sup>(47)</sup>古墳の研究は全校的に評判となり、寄宿舎では、「地歴の墓掘り」という歌謡までが作られた。おそらく重田は、東京帝室博物館時代に考古学の研究方法を習得したのであろう。また、生徒にはテーマを与えて研究させ、アドバイスを与えた。熱心な生徒には、懇切丁寧に指導した。重田は、「国史の研究に当りては熱烈なる意気と、典拠ある記録により、正確に史実を把握するやう常に努力せよ、決して言はれなき記録に信頼を置く勿れ。沉んや孫引きなどの愚をなす勿れ」と、口を酸っぱくして注意した。<sup>(48)</sup>これは重田が学んだ東京帝大国史科の確実な史料に基づく実証を重視する学風そのものである。<sup>(49)</sup>ある生徒は、「先生の史学は決して哲学でもなく批評でもなく創作でも勿論ない。当時の史界一般の学風以外のもものでは勿論なかつた。」と評している。生徒の研究成果は、広島高等師範学校の地理歴史学会や広島尚古会の例会で発表させた。尚古会の機関誌『尚古』に論文を発表させることもあった。単に概説的知識を得るだけでなく、自ら研究する態度と高い専門性を、中等教員となる生徒に求めていたのであった。

重田は常々生徒に対して、「卒業後教師として特に国史の教師として耻かしくない卒業生を出したい」と語っていた。<sup>(50)</sup>重田の同僚教授内田銀蔵は、パリの高等師範学校と広島高師とを比較して、広島高師における研究の必要性を以下のように述べている。<sup>(51)</sup>

教育家たるにも、研究の精神、研究的態度が至て必要であるといふことである。或は世間には、教育家と学者とを全く別のものがあるかの如くに考へ、学者たるには研究の念、及、研究的態度を必要とすべきも、教育家たるには、必ずしも之を要せざるべしと思ふものもあるかも知れませぬが、実際今の世に当り教育に従事するものは少くとも或る程度まで学者たることを要します。二者は全く別物ではありませぬ。始終研究者たる態度を保ち、絶えず新なる知識を求め、自から疑問を提出し、之に就き自から研究を積み、その結果を教育及教授上に応用せんと心掛くる人にして、始めて能く何時迄も時勢に後れざる教育家たることが出来る。若し研究者たることを止めたならば、単に教育家として存在することも、亦出来難きに至でありませう。但し此の研究者の態度といふものは、一朝一夕にして、得らるゝものにあらず、されば諸君には今より成るべく他人に依頼せず、自ら進んで研究するといふ風を養ひ、また研究を為すに必要な素養を作することを努め、以て他日一本立ちの学者、教育家となられたる時に、必要に応じ、独立して研究を遂行し、日に日に其の学問を新にして進み行くことが出来るやうに御準備あらんことを切望いたします。

また、重田の後任の日本史担当教授藤岡継平は高等師範での歴史教育

について以下のように述べている。<sup>(53)</sup>

高等師範学校の歴史教育は、大学のそれと比して、自ら別箇のものでなくてはならぬ教授一個の見解のみを授けて細に入り微を穿ち部分的専門的に流るゝよりは寧ろ多方面の学説を伝へて考ふる余地を与へなほ帰趨を誤らしめざらんがために些か教授の意見をつけ加へて全般に亘るべきものであらう而して出典学説の出所等を明かに教ふるは現在の為めよりは卒業後輩として寔に肝要なることに属す即ち余輩の考へを以てすれば中等教員として必要なる歴史材料を取扱ふに満足せずなほ進んで自発的に研究せんとする創造的気分を満たちたる者を養成する様に努めて且つその者の学究的態度を助成するべくその素質を作りまた卒業後その希望を満足せしむ便宜を与ふるやう教授すべきならん、なほこれと同時に学問的歴史の普通教育に於ける実地の応用法を合せ解くこと亦度外すべからざるものなることを知るべきである

ここにみられる藤岡の見解は、重田の授業のあり方とも共通している。重田も独断的な論評を下すことはなかった。後に教師となったある生徒は、「歴史教師たらんとする者の最も重要な且つ最も望まましき修行は歴史の研究に慣れると云ふことである。即ちなるべく多く古文書・典籍の読破・遺蹟遺物の調査・蒐集・鑑識・時代思潮推移の批判等の力を存養することである。而して先生はこれ等の点で常に吾々を指導しようとなさる烈々たる熱意を持つてお出でになつたのである。」<sup>(54)</sup>と重田を評している。一人前の歴史の教師になるためには、単に概説的知識を得て、「中等教員として必要な歴史材料を取扱ふ」ことが

できるようになるだけでなく、自ら史料に即して研究する学問的創造性が必要であるとの認識が、歴代の教官・生徒に共有されていたのであった。

地理歴史部の生徒に対しては、高い専門性を求めて厳しく指導したためであろう、地理歴史部の生徒の重田の印象は、恐い、むつかしい先生で共通していた。一方、専門以外の生徒にとって重田の授業は極めて楽しいものであった。英語部の生徒の回想をみてみよう。

先生の御授業はホントウに僕等英語科の生徒には肩の凝らない胸のすく、宛ら炎天下の緑陰に清泉を発見したとでも云つた様な実に愉快なものであつて、全級は大喜びで先生を迎へて居ました、尤も専門の地歴部であれば先生の方でも責任を感じられて自然ヒドク鍛えられようし、又生徒の方でも固くなつて不愉快な所もあつたでせうけれど、何しろ一寸参考科目と云ふ英語科の事であれば双方にトテモ気楽なノビノビした気分が溢つて、一層元氣潑刺たる好印象を残して居る次第です。<sup>(55)</sup>

重田は、専門科目としての日本史と教養科目としての日本史とは、異なつた授業方法を採用していたのであった。

重田の閻魔帳には、成績点数のほかに生徒の一技一芸の長所が丹念に書き込まれていた。自宅を訪ねた生徒に対しては、教室とは異なり胸襟を開いて親しく接した。正月には自宅でカルタ会を開くのが恒例であつた。<sup>(56)</sup>ただ厳しいのみでない重田の一面を忍ばせる。



### 3 修学旅行

広島高師の修学旅行は、満韓旅行を初めとする大陸旅行、伊勢大廟参拝・宮城拝観旅行、各別別の旅行に三分される。<sup>67)</sup>

満韓旅行については先に述べた。伊勢大廟参拝・宮城拝観旅行は、一九〇七年(明治四〇)三月にはじめて行われた。対象は卒業を控えた三年生。東京では文部省に出頭し、途中の府県では教育演習や学術研究を行い、以後恒例となった。<sup>68)</sup> 北条校長はこの旅行の目的を以下のように訓示している。

一 今度東上シテ東京マデ到ルハ伊勢ノ宗廟ニ参拝シ東京ニ於テハ文部ニ出頭シ親シク大臣ノ御訓告ヲ受ケ千代田宮城ノ境域ニ接シテ九重ノ宮居ヲ拝シテ聖徳ヲ懷想スルノ機会に実遇セントスル光荣ニ浴セン為メナリ

是レ学生トシテノ資格旅行ニ非ズ卒業式ニ関スル儀礼ノ形体ニ眼晴ヲ加フルモノナリ

一 伊勢ノ宗廟ハ我日本ノ国トシテノ創始ヲ顧ミ我々現在昌代ノ恩ニ浴シ内ハ生活上ノ幸福ヲ樂ミ古ノ鼓腹撃壤シテ太平ノ歌ヲ詠フト其形ヲ異ニシ心ヲ同クスルガ如ク外ハ外国ヨリ尊敬ヲ受ケテ列強ノ間ニ交ハリ広ク世界ヲ家居トスルヲ得ルハ列聖ノ高德ニ因ルモノニシテ其発源ハ我団ノ創業建徳ノ初メニ在リ宗廟ニ参拝シテ崇敬ノ意ヲ致シ其神徳ヲ頌スルコトハ国家ノ教育ニ徒事スルモノノ職務上ニ関スル根本的ノ意味ニ属ス

一 此列聖ノ宿徳ヲ代表セラル、今上陛下ニ御近ヅキ致スコトハ我々ハ容易ニ出来ヌ事ナリ宮城ニ入りテ以テ振天府ヲ拝観スル等

ニ由リ直接ニ聖徳ノ一端ヲ御窺ヒスルコトヲ得ベシ伊勢ニ於テハ古ヲ思ヒ千代田城ニ於テハ現今ニ於ケル聖世ノ恩沢ノ出ル所ノ中心ヲ知ル事ト為ル

一大廟ヲ崇敬スベキ事理ハ 今上陛下ハ現在ニ於ケル国家存立ノ生命ト為ラセラレ国民ノ人心ヲ統一セラル、事トハ道理上ニ於テ理会スル事柄ナリ国家教育ニ於ケル忠君愛國ノ主義ト此事理觀念ヨリ発源スル事ハ我々既ニ了解熟知スル所ナリ然レドモ感情ハ實際ノ境遇ヨリ湧起スルモノナリ諸子ノ現今ニ於ケル之ニ関スル感情ハ如何ナルヲ知ラズ

一 余ハ嘗テ召サレテ宮城ノ御宴ニ列シ又 畏多クモ親シク拝謁ヲ許サレタルコトアリ山田ニ参拝シタル事アリ其時ノ感情ハ今之ヲ述ブル必要ナシ諸子ハ今回自ラ之ニ実遇シテ如何ナル感情ガ発動スル之ヲ自知スベシ<sup>69)</sup>

この旅行は、国家主義教育を全面的に肯定し、天皇にかかわる諸行事を大切にして、天皇尊崇の考え方をたたき込んだ北条時敬および広島高師の教育方針<sup>69)</sup>を象徴する行事である。この旅行に重田がどのように関与したかを詳らかにすることは出来ないが、「伊勢大神宮の大前で恭しく位階を自署せられ鞠躬如として内陣に参入せられた時の端厳莊重な風度は、今も猶私の網膜を離れぬ強い印象である。」<sup>69)</sup>と回想している生徒がいる。これはおそらく、修学旅行の時の模様であろう。

大陸旅行、伊勢大廟参拝・宮城拝観旅行は全校行事であったが、各部門ごとに「学術研究及教育演習ノ為メ時々修学旅行ヲ行」った。一九〇八年(明治四一)の地理歴史部の旅行地は、神戸・大阪・奈良・京都・

門司・中津・山移・宝泉寺・栃木・熊本・二日市・太宰府・箱崎であり、日数は二〇日間であった。<sup>(63)</sup>一九〇九年の冬休み一二月末から翌年一月にかけては、朝鮮に修学旅行を行った。この間、重田は先頭に立って生徒を指導した。<sup>(64)</sup>折開城を見学したときには、旧王城跡の礎石の位置などを測量し、その成果をまとめた「高麗の旧都」を『歴史地理』第一六巻第六号（一九一〇年）に発表した。一九一二年にも、一年二年ともに朝鮮を九日間旅行している。<sup>(64)</sup>

重田が中心となり積極的に関与した旅行は、この地理歴史部の修学旅行である。「先生」の回想記を総合すると、重田は毎年のように京都・奈良に引率しており、生徒たちにとって、修学旅行における重田は非常に印象深いものであった。この旅行は本科一年の学年休みに行われ、期間は三週間。見学先として確認できるのは、薬師寺などの畿内の寺々、飛鳥などであり、京都歌舞練場で都踊りを見学したこともあった。

重田は、「修学旅行は決して物見遊山にあらず、真に修養研究の好機会である。決して空費すべきにあらず」と位置づけていた。午前五時頃起床し、五時半頃には生徒を起こして、六時半には宿を出発、宿に戻るの日は暮れてから、というのが通例であった。生徒たちの先頭立って早足で歩き、実地について生徒を指導する。京都・奈良の地理には非常に詳しく、路地、小道、畝も縦横に歩き回った。宿に帰ると生徒たちを自室に呼び、その日の見学地に対する口頭試問を行った。満足な答えが出来ないと遠慮ない叱責が飛ぶ。「それだから修学旅行に対する君等の見解を覚醒したくなるのだ、今晚徹夜しても今一

日中の視察要項を取り纏め、明日又此の今井に泊する事にするから明晩明確に回答して貰う事にする」とは、一九〇九年（明治四二）に藤原京を見学した夜の発言である。<sup>(65)</sup>生徒たちはそれから観察記録を整理し、日誌を書く。床に就くのは一二時を過ぎるのが通例であった。また、移動の車中も質疑応答の場であった。修学旅行はまさに史蹟・遺物に即した実習の場であり、学校での授業を補完するものであった。

#### 4 地理歴史学会

「広島高等師範学校職員生徒一致融和シテ家族的団体ト為リ特性ヲ涵養シ学芸ヲ講究シ身体ヲ錬磨シ本校ノ校風ヲ発揚シ教育ノ資助トナス」（広島高等師範学校校友会則）ために、開校の翌一九〇三年（明治三六）に校友会が組織された。校友会には、講談部・学芸部・運動部の三部と附属団体として教育研究会・国語漢文学会・地理歴史学会・英語学会・数物化学会・博物学会が置かれた。これらの学会では例会や大会を開いて専門学科の研究を進めた。<sup>(66)</sup>

地理歴史学会は一九〇三年五月中旬に、堀卓次郎（英語・地理）・新見吉治・八谷彪一（鉱物学及地質学・地理）の三教授と同窓一九人の間で話がまとまり、同月新見宅で会合したのを濫觴とする。以来毎月一回づつ各教授宅で会合し、一九〇四年一月の例会で「地理歴史法制経済を研究し併せて会員相互の親睦を厚うするを目的とす」との規則を制定した。<sup>(67)</sup>月例会で講演や研究発表などを行うとともに、時には見学旅行も開催して研鑽に努め、一九一〇年一二月には会誌を創刊した。

地理歴史学会の活動の中で注目すべきものに、「地理歴史参考品展

「覧会」がある。これは、広島高師において一九〇五年(明治三八)一月五(日)・六(月)の両日に開催され、一般市民に公開されたものである。六月に「九月を期して地理及び歴史に関する参考品を蒐めて展覧会を開き、会員各自の実物研究に資する傍、斯学の趣味を広島地方に鼓吹せん」という議がおこり、夏期休業以来準備に着手して実現したものであった。列品は以下のように分類されていた。

第一部 歴史部

第一類(以下一の如く略記) 石器時代遺物／二 古墳時代遺物／三 瓦磚／四 貨幣、紙幣、切手／五 金石文／六 文書／七 類書／八 画／九 写真／十 図表／十一 甲冑／十二 煎茶席飾、文房具飾／十三 抹茶席飾

第二部 地理部

一 図表／二 器械／三 標品／四 雑誌／五 写真  
部員(生徒)達はこの展覧会を次のように自己評価している。

歴史部の陳列は斯学の範囲広大なるにより、部類も亦広汎なるに拘はらず、出品点数比較的少く、その間往々系統的ならざる所なきに非ず、且つ本邦歴史の参考品に富みて東洋西洋の品種に乏しかりしことは部員の夙に自認する所なり、されど歴史考古の参考品は、…遠路よりの出品は、…とうてい望み得べからざる事情ありて、広島市内及び附近所蔵者の出品に依頼せざるべからず、…吾人は初め美術工芸、服飾、遊戯等の部類をも設けんと予期したりしが、到底一部類をなすに到らざるを察して半途にして之を中止したりき…地理部は亦歴史部と同じく斯学の範囲頗る広きを

以て、之に対して十分なる参考品を出陳せんは素と容易の業にあらず、…只本校所蔵のものと両三氏の藏品とを出陳したるのみ

歴史部の展示品では、石器時代遺物・古墳時代遺物・瓦磚・金石文の中に広島高師所蔵品が多くみられる。このうち、日向国児湯郡下穂北村出土の石槌は、重田寄贈になるものである。「吾校ノ歴史科ハ新見教授創設ニ着手シ重田教授ノ来任ニ由リテ歴史標本室ノ創設セラレタル以来教授ハ頻リニ諸方面ヨリ標本ヲ蒐集セラレ自ラ有用ナル標本ヲ寄附セラレタルモノ多シ」との北条の発言を裏付ける一例である。また、展覧会出品には重田の個人藏品もみられる。

歴史部の出品分類のうち、貨幣・金石文・文書・(図)画・文房具は、帝室博物館歴史部の列品区分にみられ、石器時代遺物・古墳時代遺物・甲冑は、帝室博物館の上古遺物・武器に相当する。当初予定していた服飾・遊戯も帝室博物館の列品区分にみられる。この展覧会は、帝室博物館の展示に範を取っていたのである。その際、重田が博物館勤務の経験を生かして指導に当たったことは想像に難くない。陳列の準備中、重田の逆鱗に触れた生徒が叱責され、涙を流して泣いたこともあった。

部員たちは、それぞれの担当部類を決めて、陳列品の解説を準備した。しかも、当日は観覧者に直接説明を行っている。また、この展示のために歴史地図表一二表を作成した。古文書の整理にあたったものは、分からない字を夜の一時一二時頃まで写し取り、古文書を読む素地を習得した。こうして、生徒たちはそれぞれの標本について習熟し、教育的効果は大きかった。観覧者の立場からみても、生徒たちが

直接説明したため内容の理解が容易になり、満足度も高くなったという。現在ではボランティアによるガイドを導入する博物館も増えてきてはいるが、地理歴史部が明治期に既にそれを行っていたことは、高く評価できよう。

この展覧会は市民の好評を博し、初日一、〇三五五、二日目三、〇七九人ももの観覧者が詰めかけた。当時の広島市は人口一五万人に達しようとしていたが、未だ博物館はなく、地理・歴史の展覧会は、これが最初のものであった。この展覧会によって、市民の地理・歴史への関心が高まった。翌年九月二三日には、「民間信仰に関する事物の展覧会」というユニークな展覧会を開催し、約五〇〇名の外来者の參觀を得た。当時の広島高師は地域の人々に広く開かれていたのであり、地理歴史部の展覧会は人文科学における地域への貢献という観点からも、改めて評価されるべきものと考ええる。

重田の校友会に関する活動は、地理歴史学会のほか、絵画同好会の評議員・主事としての活動がある。この会は一九〇五年（明治三八）一月に組織され、一九〇七年以降校友会の附属組織となった。例会・大会を開いて絵画に関する講演や展覧を行ったり、観覧旅行やスケッチ旅行なども実施していた。<sup>(7)</sup> 重田は幼少期より書画に親しんでいたが、重田自身が絵を描くことを趣味としていた形跡は伺えない。重田は和歌を趣味としていた。折に触れて和歌を作成しており、入院中には見舞客への返答も和歌で行うほどであった。

## 5 広島尚古会

重田の広島時代の大きな業績として、広島尚古会の創設が挙げられる。広島高師着任早々頼杏坪の研究に着手した重田は、史料収集の傍ら諸種の研究会を起こした。一九〇六年（明治三九）三月には、広島付近の古名家の墳墓を調査し顕彰するために、柴山啓一郎と「名家墳墓掃苔会」を創設した。藤田精一、新見吉治、中村久四郎、能見定次郎がこれに賛同し、四月二日に広島学士俱樂部において発起人会を開いて「広島尚古会」が誕生したのであった。同月二十九日には第一回例会を開いて規約を確定した。「本会は広島県内の古蹟を調査顕彰するを以て目的とす」（規約第二条）と規定し、「本会の目的を達するため調査、出版、講演、揭示を行ふ」（規約第三条）こととなった。重田は、「本会の事務を総理し会員の事業分担を定む」（規約第一〇条）ことを職務とする幹事長に就任した。同月機関誌「尚古」を刊行した。全国的に見ても、郷土史研究雑誌の先駆けであった。九月三〇日の臨時会兼第六例会で規約を改正し、男爵浅野忠純が会長に就任した。<sup>(8)</sup> 「尚古」第一号では、会の趣旨を次のように謳っている。

広島県下は、古来事蹟に富み、又た人物に乏しからず、然るに史伝の備らざる、世故功業其詳を伝へず、遺老は漸く物故して口碑減少し、旧家亦た或は零落して文献日に散逸す、誠に慨すべきなり今同感者相謀りて去簪一団を成し、号して広島尚古会と曰ふ、其目的他なし、広島県下古来の事蹟を調査して之を顕彰するにあり、其方法は、力めて遺老の口碑を存記し、所在の文献を蒐集し、時に集會して史事を談話し、或は定時若くは不時に印刷物を発刊

して同好に配布し、或は墳墓を訪ひ遺址を尋ねて之を表示する等、事一にあらず、其会員たるものは、学者に限らず、門地に関せず、老少男女を問はず、住居の遠近を論ぜず、凡そ斯目的を同くするものは、本会を以て中心となし、其紹介に由りて、交々問ひ、交々答へ、或は本会の指名に因りて或る史料を探索し、或は会員自己の意見を以て或る事蹟を発表す、其利益蓋し少なからざるべし、尚ほ他に諸多の方法手段あらんも、取捨将来会員の考案に任す、只偏に同感諸士の賛同を待つのみ、

広島高師教授山下寅次(東洋史)は、「尚古会は毎月一回の雑誌を発行し、また毎月一回の講演を催した。丁度その組織は東京の史学会と同様であつた。尚古会の中核たりし重田氏の意中は正に其処にあつたものと思ふ。」と述べており、尚古会は史学会を一つのモデルとしていた。しかし、史学会にそのまま倣つたのでは、「広島県内の古蹟を調査顕彰する」ことが会の目的とはならない。史蹟顕彰を目的とした点については、重田が帝室博物館時代に帝国古蹟取調会の幹事であつたことが大きく影響したものと考えられる。帝国古蹟取調会は、一八九九年(明治三二)五月に西郷従道・長岡護美らによつて創立された民間の史蹟保存団体であり、一九一〇年には史蹟老樹調査保存会が開催され、これが翌年の史蹟名勝天然紀念物保存協会に発展した。<sup>(76)</sup>帝国古蹟取調会において古蹟の調査に関する事項の総てを議決した調査委員会の調査委員には、重田と関係のあつた星野恒・三上参次・三宅米吉が名前を連ねている。<sup>(77)</sup>重田は会報を編集していたのであるが、重田が同会に参与するようになったのは、博物館の上司でもあつ

た三宅との関係によるものであろう。広島尚古会は、かねてから史蹟保存に大きな関心を寄せていた重田が、帝国古蹟取調会の影響を受け、學術研究面では史学会に範を取つて創設したものと見えよう。

この広島尚古会を基盤にして、重田は地域の人々や広島高師生徒たちと一体となつて、史蹟保存・歴史研究や歴史教育活動を展開したのであつたが、広島尚古会の活動の詳細については、いずれ稿を改めて論じたい。

## おわりに

本稿を終えるにあつて、第三節冒頭で紹介した重田教授送別式演説概要の中略部分を紹介しておこう。

一 重田君ハ本校ノ公務ノ傍ラ広島尚古会ヲ興シ地方史蹟ヲ明ニシ常ニ畿島ニ往来シテ神社ノ古記其宝物ニ関シ講究スル所アリ頼杏坪ノ事跡ヲ調ヘ其伝ノ著作アリテ以民風教ニ資セラレタル所アリ大学ノ嘱託ニ依リ野崎文書ノ歴史的価値ヲ討尋シ近頃内務省ノ為ニ各地ニ出張シテ地方義倉制度等徳川時代ノ救恤事業ヲ調査セラレ此等ノ事項ノ為ニ大ニ其精力ヲ傾注セラレ学問上並ニ一般ノ教育上貢献セラレタル事頗ル大ナリ此ノ如キハ吾校ノ教育ト直接関係ナシト雖モ間接ニ裨益スル処深キモノアリシヲ疑フザルナリ此等ノ事項ハ重田氏ノ個人学問ト精力トニ由リテ挙リタルモノタルハ論スルヲ俟タスト雖モ抑モ同君ノ吾学校ニ於ケル教授タル地位之ヲ成サシメタルモノアルコトヲ思ハゞ一般ノ学問社会地方ノ教

育社会ニ対シテ重田氏一人ノ力ヲ以テ学校ノ名ヲ重カラシメタルコトニ功アリト謂ハザル可ラズ是学校ノ外部トノ関係上重田氏ニ負フ所アルコトヲ闡明ニシテ以テ重田氏ニ謝意ヲ表スルヲ当然ナリト信ズ

この北条校長の演説は、他の教授送別の辞と比べると、著しい特徴がある。一つには重田個人の研究内容にふれている点である。北条は教官の研究より教育を優先させる思想を有していたが、「各教官ノ其専門学科研究ヲ務ムルハ直接本校ノ目的ニ非ズト雖モ間接本校ノ教育ニ裨益スルコト必ズ多カラントヲ信ズ故ニ本校ハ経費ノ許ス限り各教官専門学科研究ニ便利ヲ与エント欲ス」と述べたように、研究にも出精せよと説き、研究と教育との調和も目指していた。<sup>(4)</sup> 重田の歴史研究は、「間接本校ノ教育ニ裨益スルコト」多大だったのである。

二つ目の特徴は、学校内の活動だけでなく、地域社会での活動に触れている点である。「廓堂片影」には、広島高師校長時代の北条時敬の教授送別式における演説の概要を一〇点収めているが、その中で上記二点に論及しているのは重田に対してのみである。北条は送別式でも教員を褒めることがあまりなかった<sup>(5)</sup>ことを考えると、北条が重田のこの活動をいかに高く評価していたかがわかる。北条自身、広島尚古会の会員でもあった。重田の歴史研究は、学校での教育に結びつき、地域社会と学校との結節点でもあったのである。

本稿では紙数の都合もあって重田の研究内容に立ち入ることは出来なかつたが、頼杏坪・厳島神社に関する研究は、広島時代の主要な業績である。重田は広島にいる間は広島の史料によって研究し、それが

学位論文に結実した。広島県における史蹟調査の先駆者でもあった。文化史への造詣も深く、厳島舞楽が現在まで継承されているのも、重田の業績に負うところがある。重田は毎年広島尚古会の事業として広島高師で舞楽の演奏会を開催し、その保存・継承に努めた。重田の活動は学校内に止まらなかつた。学校・学会（広島尚古会）・地域社会が三位一体となつて教育研究活動が行われたのであつた。このことは、人文科学における地域貢献のあり方の模範的事例としても、改めて評価すべきものであろう。

## 注

- (1) 「広島高等師範学校史」「広島大学二十五年史 包括校史」広島大学、一九七七年。
- (2) 『国史大辞典』第七卷（吉川弘文館、一九八六年）「しんみきちじ」の項。
- (3) 新見吉治「懐旧談」「尚志同窓会誌」第二八号、一九一七年。一九〇三年（明治三六）現在で、「本校ノ為メニ」海外留学を命ぜられたものは四人、教授で海外留学中のもは二人いた（北条時敬「開校式演説条目」西田幾多郎編「廓堂片影」教育研究会、一九三二年）。地理の教官である中目覺もヨーロッパへの三年間の留学を条件に広島高師教授に就任している（石田寛「エリート教授中目覺―二番目に早い高等教育地理（広島高師）プログラム創始者―」「広島大学史紀要」第二号、二〇〇〇年）。
- (4) 新見吉治「北条先生を憶ふ」「尚志」第一〇九号附録「北条時敬先生」、尚志同窓会、一九二九年。
- (5) 「広島高等師範学校一覽 従明治三十六年至明治三十七年」広島高等

- 師範学校、一九〇三年。『広島大学二十五年史 包括校史』(前掲)に再録。
- (6) 三好信浩「専門職としての力量形成の方策」『尚志会創立八十周年記念』尚志会、一九八七年。
- (7) 新見吉治「北条先生を憶ふ」(前掲)。
- (8) 新見吉治「懐旧談」(前掲)。
- (9) 新見吉治「分け登る歴史学の山路」新見吉治先生頌寿記念刊行会、一九六九年。
- (10) 新見吉治「分け登る歴史学の山路」(前掲)。
- (11) 広島文理科大学・広島高等師範学校『創立四十年史』広島文理科大学、一九三二年。
- (12) 新見吉治「北条先生を憶ふ」(前掲)。
- (13) 三好信浩「専門職としての力量形成の方策」(前掲)。引用史料は、北条時敬「開校式演説条目」『廓堂片影』。
- (14) 北条時敬「滿韓地方修学旅行生徒ニ訓示ノ要目」『廓堂片影』。
- (15) 三好信浩「日本師範教育史の構造―地域実態史からの解析―」東洋館出版社、一九九一年。
- (16) 北条時敬「謝辞条目」『廓堂片影』。
- (17) 北条時敬「卒業生ノ訓示ノ項目」『廓堂片影』。
- (18) 「広島高等師範学校一覽 自明治四十年至明治四十一年」広島高等師範学校、一九〇七年。
- (19) 「広島高等師範学校一覽 自大正四年至大正五年」広島高等師範学校、一九一五年。
- (20) 「広島文理科大学・広島高等師範学校・第二臨時教員養成所一覽 自昭和七年至昭和八年」広島文理科大学、一九三二年。
- (21) 「日本人名大事典」第三卷(平凡社、一九七九年復刻、初版は「新撰大人名辞典」として一九三七年発行)は、一八六〇年(安政七)生まれとするが、「年譜」「小伝」により、一八七四年生まれとした。なお、「日本人名大事典」は、管見の限りでは重田について立項した唯一の辞書であるが、生年のほかにも不正確な記述がある。
- (22) 重田定一「頼杏坪先生伝」積善館支店、一九〇八年。
- (23) 三上参次「重田定一君」『先生』。
- (24) 中村徳五郎「重田博士を憶ふ」『先生』。
- (25) 中村徳五郎「重田博士を憶ふ」(前掲)。
- (26) 三上参次「重田定一君」(前掲)。
- (27) 塚原政次「重田君を憶ふ」『先生』。
- (28) 東京国立博物館所蔵「東京帝室博物館第一報明治三十三年」。
- (29) 東京国立博物館編「東京国立博物館百年史」第一法規出版、一九七三年。
- (30) 喜田貞吉「重田定一君の追憶」『先生』。
- (31) 「史学雑誌」第八編第八・九号、一八九七年。
- (32) 「史学雑誌」第九編第九・一〇・一一号、一八九八年。
- (33) 東京国立博物館所蔵「明治三十四年東京帝室博物館処務要項」。
- (34) 「重田先生日記抄」『先生』。
- (35) 南北朝正閏問題については、大久保利謙「ゆがめられた歴史」『大久保利謙歴史著作集』七、吉川弘文館、一九八八年、初出一九五二年、参照。
- (36) 栗田茂治「重田先生の懐ひ出」『先生』。
- (37) この文章は、東北地方旅行中の一九三四年七月一〇日に書かれたもの

- である。喜田自身が南北朝正閏問題について回顧したものは、還暦を記念して一九三三年四月に作成した自叙伝『六十年の回顧』（喜田貞吉著作集）第一四巻、平凡社、一九八二年）がある。なお、「重田定一君の追憶」は「喜田貞吉著作集」第一四巻の「著作目録」に収録されていない。
- (38) 『明治四十四年職員録（甲）』（明治・大正・昭和官員録・職員録集成）第一〇三巻、日本図書センター、一九九〇年。
- (39) 渡部董之介「重田定一君を憶ふ」「先生」。
- (40) 田所美治「故重田博士を追憶して」「先生」。
- (41) 喜田貞吉「重田定一君の追憶」（前掲）。
- (42) 内田銀蔵は、欧州留学中の一九〇五年（明治三八）三月に広島高等師範学校教授に任命され、一九〇六年六月に帰国した。この年、京都帝国大学に文科大学が増設されることとなったため、八月からは京都帝国大学文科大学教授を兼任し、京都帝大に史学科が開設された一九〇七年五月には京都帝大専任教授となった（「故博士の略歴」「芸文」第一〇年第八号、一九一九年）。
- (43) 新見吉治「懐旧談」（前掲）。
- (44) 尚志会所蔵「明治四十四年北条校長訓辞演説綴」。「廓堂片影」には、「重田教授送別式演説概要」は収められているが、「重田教授職務上ノ経歴」は収録されていない。
- (45) 「歴史科講習筆記」私立岡山教育会、一九一四年。
- (46) 吉本泰山「重田先生の印象」「先生」。
- (47) 新見吉治「重田定一博士を憶ふ」「史蹟名勝天然紀念物」第一一集第一二号、一九三六年。
- (48) 伊藤恂造「故重田先生を憶ふ」「先生」。
- (49) 東京大学百年史編集委員会編集『東京大学百年史』部局史一、東京大学、一九八六年。高木博志は、「黒板勝美以降、東京帝国大学国史学講座が、制度的に政府の歴史教育のイデオロギー政策をになう機関となつてゆく」と指摘している（高木博志「史蹟・名勝の成立」『近代天皇制の文化史的研究』校倉書房、一九九七年、初出一九九一年）。軍記・物語等ではなく、日記・文書といった確実な史料と厳密な論証とに基づく歴史研究の方法を確立し、道徳的価値判断の基準として歴史をとらえようとするそれまでの歴史通念を否定して、客観的な史実の探求考証を主眼とする新しい歴史学の建設を志した重野安繹らの学風（『東京大学百年史』部局史一）を忠実に受け継いだ重田は、南北朝正閏問題後の国定教科書改訂に際して、どのような態度で臨んだのであろうか。重田は明治三〇年代前半に『中学日本史』上・下（内田老鶴圃、一八九九年）、『中学国史』高等・初等（普及社、一九〇二年）といった教科書を執筆しているが、これらは当時の学界状況に倣って「南北朝時代」の章を立て、南北朝对立について記述していたのである。その史学史的意味については別の機会に論じてみたい。なお、黒板勝美は、重田にとって東京帝大國史科での一年先輩にあたる。
- (50) 健依別「重田先生を想ふ」「先生」。
- (51) 長谷川與三治「追憶の一二」「先生」。
- (52) 内田銀蔵「巴里の高等師範学校に就きて」「校友会々誌」第七号、広島高等師範学校校友会、一九〇七年。
- (53) 「藤岡先生を訪ふ」「会誌」第七号、広島高等師範学校地理歴史学会、



一九一七年。

- (54) 鶴飼生駒「思ひ出」『先生』。
- (55) 松岡藤太郎「重田先生の印象」『先生』。
- (56) 生徒が教官の私邸を訪ねて師弟の交流を緊密にしたことは、校長北条時敬の教育方針によるものであり、広島高師の伝統となっていく(三好信浩「日本師範教育史の構造」(前掲))。
- (57) 「広島高等師範学校校史」(前掲)。
- (58) 「広島高等師範学校校史」(前掲)。
- (59) 北条時敬「教生上京旅行ニ付訓示演説条目」『廓堂片影』。
- (60) 三好信浩「日本師範教育史の構造」(前掲)。
- (61) 健依別「重田先生を想ふ」(前掲)。
- (62) 「広島高等師範学校概覧 自明治四十年至全四十一年」広島高等師範学校、一九〇八年。
- (63) 中目覺「重田君を憶ふ」『先生』。
- (64) 「広島高等師範学校概覧 自明治四十四年至明治四十五年」広島高等師範学校、一九一二年。
- (65) 伊藤恂造「故重田先生を憶ふ」『先生』。
- (66) 「広島高等師範学校校史」(前掲)。
- (67) 「地理歴史会記事」『校友会々誌』第三号、広島高等師範学校校友会、一九〇五年。
- (68) この展覧会については、「地理歴史参考品展覧会紀事」『校友会々誌』第五号、広島高等師範学校校友会、一九〇六年、による。
- (69) 帝室博物館の列品区分については『東京国立博物館百年史』(前

掲)参照。

- (70) 中島豊之「故重田先生を偲びて」『先生』。
- (71) 栗田茂治「重田先生の懐ひ出」(前掲)。
- (72) 一九〇八年(明治四一)からは、官立学校ではじめて図書館を一般に公開した。校友会や附属学校の教育研究会の活動は一般に公開され、地域文化の向上に貢献した(三好信浩「日本師範教育史の構造」(前掲))。
- (73) 「広島高等師範学校校史」(前掲)。
- (74) 「尚古」第一号、一九〇六年、新見吉治「重田定一博士を憶ふ」(前掲)。
- (75) 山下寅次「追憶」『先生』。
- (76) 「帝国古蹟取調会役員」『帝国古蹟取調会々報』第二号、一九〇二年。「帝国古蹟取調会規則」には「幹事ハ会長及幹事長ノ命ヲ承ケ又ハ調査委員会ニ属シ会務ヲ分掌ス」(第一二条)とある。
- (77) 高木博志「史蹟・名勝の成立」(前掲)。
- (78) 「調査委員会規定」『帝国古蹟取調会々報』第二号。
- (79) 「帝国古蹟取調会役員」『帝国古蹟取調会々報』第二号。
- (80) 喜田貞吉「重田定一君の追憶」(前掲)。
- (81) 三好信浩「日本師範教育史の構造」(前掲)。引用史料は、北条時敬「学年始業ニ際シ教官ニ口達事項」『廓堂片影』。
- (82) 新見吉治「北条先生を憶ふ」(前掲)。

(かん まさき・広島大学五十年史編集室員)